

【方針策定の目的】

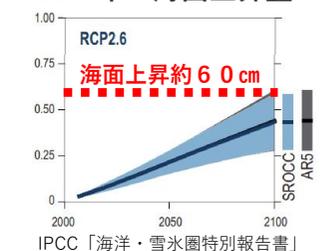
- ▶ 気候変動に伴う風水害リスクの増大に対する都の河川施設整備の方針として、令和5年12月に今後目指すべき整備目標や整備手法などを取りまとめた「気候変動を踏まえた河川施設のあり方」（以下、「あり方」という。）を策定
- ▶ 本整備方針は、あり方を踏まえ、東部低地帯の河川における高潮対策について、各河川の最適な整備内容や時期等を示し、今後の対策を着実に推進することを目的とする

整備目標

将来の気候変動に伴う海面上昇や台風の強大化に対しても河川からの溢水を防止

- ◆ 気候変動（2℃上昇）を考慮した伊勢湾台風級（930hPa）の高潮と海面上昇量0.6mに対応
- ◆ 江東内部河川等においては、気候変動（2℃上昇）を考慮した降雨にも対応

<2100年の海面上昇量>



気候変動を考慮した計画堤防高及び計画高潮位の設定

将来の海面上昇や台風の強大化を考慮して計画高潮高を設定
さらに、波の打上高等を加えた高さを計画堤防高に設定

$$\text{気候変動を考慮した計画堤防高} = \text{朔望平均満潮位 (A.P.+2.1m)} + \text{海面上昇 (0.6m)} + \text{高潮偏差*} + \text{遡上*} + \text{打上高等*}$$

気候変動を考慮した計画高潮位

※気候変動を考慮した伊勢湾台風級の台風（930hPa）により算出

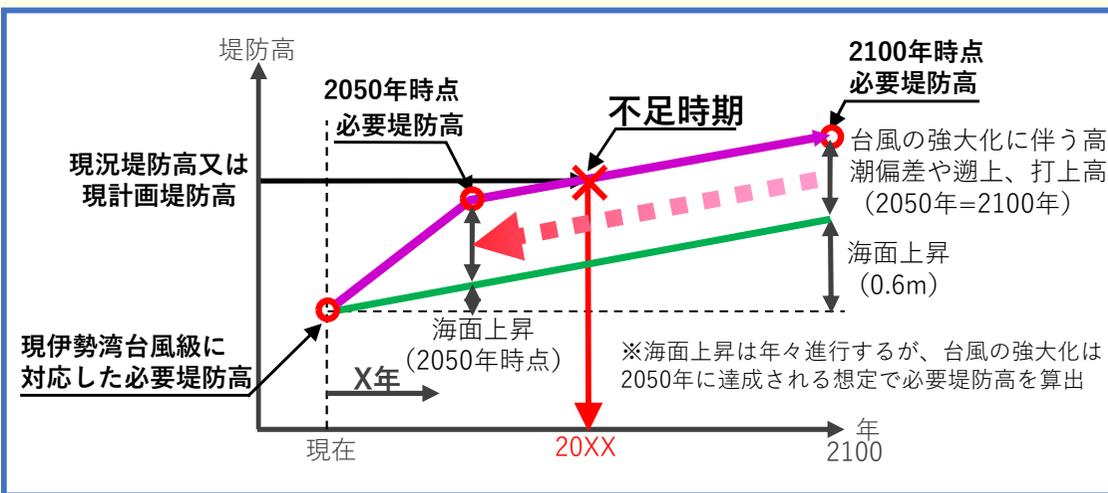
主な河川における気候変動を考慮した計画高一覧

河川名	朔望平均満潮位 (A.P. m)	海面上昇 (m)	高潮偏差及び遡上 (m)	打上高等 (m)	計画高潮位 (A.P. m)	計画堤防高 (A.P. m)	嵩上量 (m)
隅田川	2.1	0.6	3.0~3.6	0.6	5.7~6.3	6.3~6.9	0~0.6
新河岸川			3.6	0.6	6.3	6.9	0.6
石神井川			3.4	0.6	6.1	6.7	0.9
神田川			3.0	0.4	5.7	6.1	0.6
古川			2.5	0.4	5.2	5.6	0.5
目黒川			2.2	0.2	4.9	5.1	0.5
呑川			2.0	0.2	4.7	4.9	0.3

【各河川における整備時期】

- ◆ 気候変動による海面上昇や台風の強大化等の進行に応じて将来必要となる高さを算出し、現況堤防高または現計画堤防高と比較して高さが不足する時期までに対策を実施
- ◆ 河川整備計画の対象期間内（20～30年間）に対策が必要となる河川を優先度1に設定

堤防高さが不足する時期の考え方



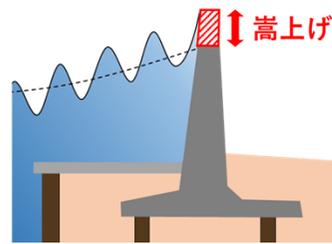
各河川の整備時期

優先度	対策必要時期	河川名
優先度 1	2040年頃	目黒川、古川、海老取川、石神井川
	2050年頃	呑川、旧江戸川（上流側）
優先度 2	2080年頃	新河岸川、日本橋川、神田川、妙見島
優先度 3	2100年以降	隅田川、中川、旧江戸川（下流側）

【各河川における整備内容】 ◆必要な高さを確保することを基本とし、河川の特性を踏まえて各河川の整備方針を設定

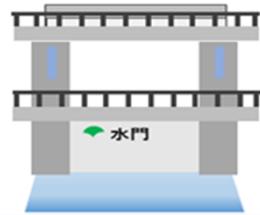
防潮堤嵩上げ

- 周辺や橋梁への影響が少ない河川においては、防潮堤を嵩上げ（新河岸川、石神井川、神田川、古川、目黒川、呑川、海老取川、妙見島）
- 嵩上げはコンクリートを基本とし、景観等に配慮が必要な場合はその他の方法も検討



水門等整備

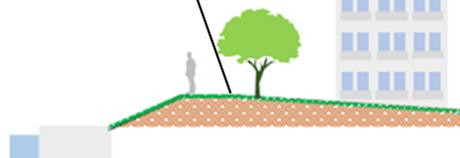
- 低い橋梁が多く、周辺の土地利用から嵩上げが困難な河川においては水門を整備（日本橋川）
- 現行計画で河口部に樋門・排水機場を整備する立会川については、気候変動対応で実施



スーパー堤防整備

- 現在のスーパー堤防計画高は、気候変動を考慮した必要堤防高を上回る
- 現在実施中の河川では引き続きスーパー堤防整備を促進（隅田川、中川、旧江戸川）
- 今後、対象河川の拡大を検討

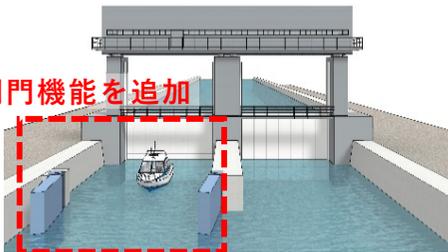
現計画堤防高 > 気候変動対応必要高



江東内部河川

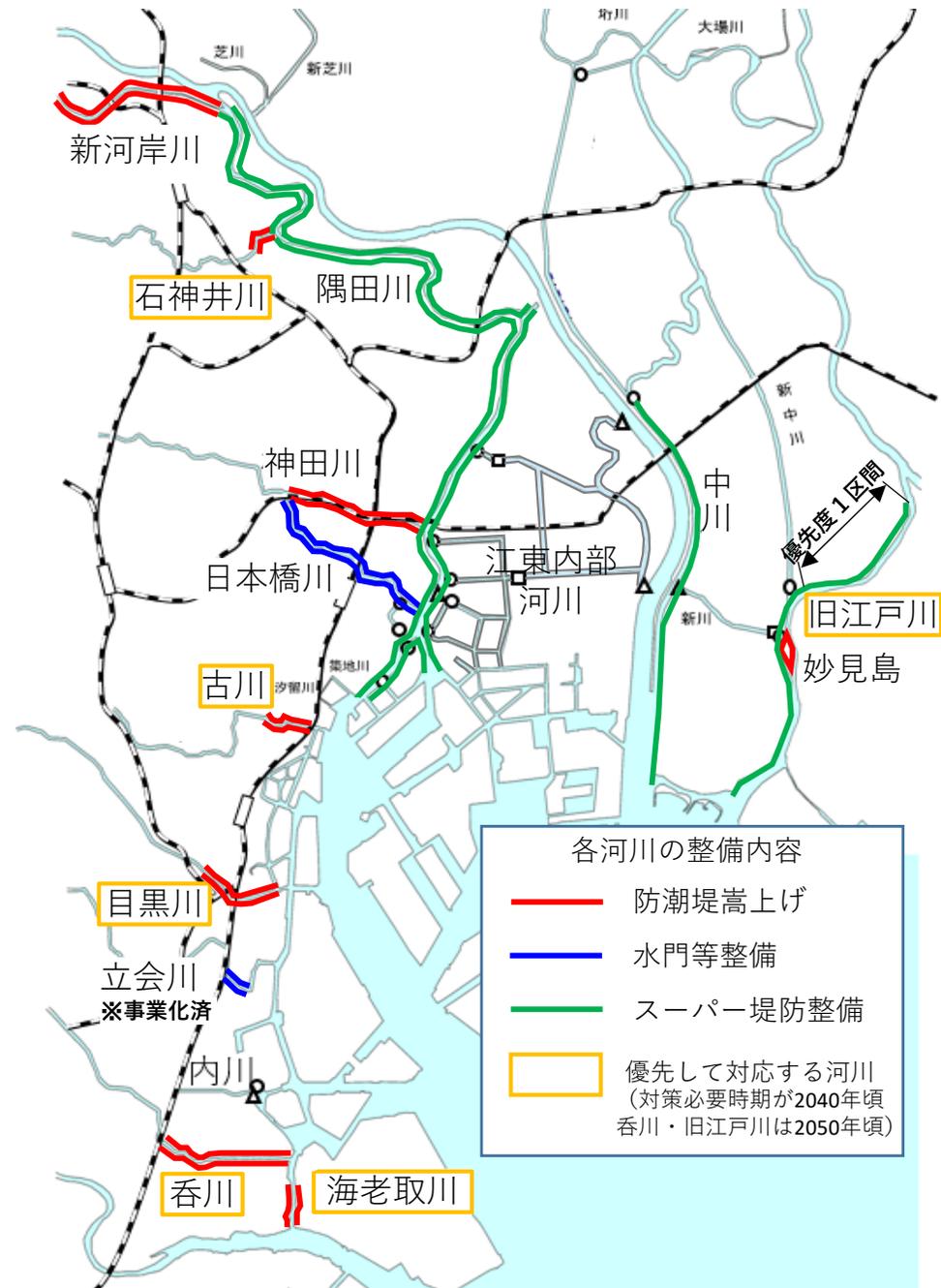
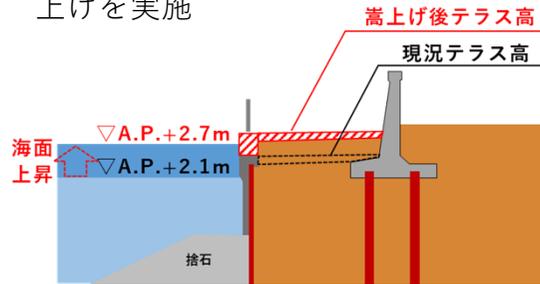
- 気候変動を踏まえた計画降雨に対し、現在の排水機場の能力で対応可能
- 海面上昇により満潮時に水門閉鎖が生じるため、水門に閘門機能を追加

閘門機能を追加



隅田川テラス

- 海面上昇に伴い満潮時に浸水する可能性があるため、今後実施するテラスは高く整備し、既存のテラスも嵩上げを実施



各河川の整備内容

- 防潮堤嵩上げ
- 水門等整備
- スーパー堤防整備
- 優先して対応する河川 (対策必要時期が2040年頃 呑川・旧江戸川は2050年頃)

各河川における整備内容